

# たより



第 10 号

平成 25 年度夏季教職員研修講座

【寺本潔先生を迎えて 玉川大学教育学部教育学科教授・学部長】

## 師範授業「地図で教える工業生産」 講演会 「言語力が伸びる社会科の授業づくり」

～もしもしカメよ～ という歌のメロディに合わせて防災体操。緊張していた子どもたちの表情が和らぎます。南海トラフの話は関心が高く、子どもたちも引き込まれていきます。



「地図帳を開いてください。」と、授業が始まりました。東京、横浜、静岡・・・と都市の名前を見つけ発表していきます。リズムカルな指名が授業のテンポをつくっていきます。黒板の下の方にピンクのベルトを描き、その上に都市の名前を順番に並べていくと、太平洋ベルトの出来上がり！ 黒板の隣に掲げた日本地図と比べると、太平洋ベルトの位置が一目瞭然。黒板と地図を見比べていると、不思議なことに疑問がいっぱい出てきます。

そこで、発問。「工業のさかんな地域はどんなところにあるのかな。それは、どうしてかな。」と寺本先生。工場で物をつくるお仕事を工業というのだと説明し、教科書を見ながら四大工業地帯を確認していきます。「京浜工業地帯」は、東京の「京」と横浜の「浜」をとって名づけられたことや、東京と京都の真ん中にあるから「中京工業地帯」なのだと教えてもらうと、子どもたちだけでなく参加された先生方も納得の表情です。地図を見て工業地帯の位置を確認しては、考える子どもたち。

必要な知識をきちんと与えた上で、何を考えるのかを明確にして子どもたちの集中力を高めます。そして、黒板に文字で『工業地帯や工業地域が太平洋ベルトに集まっているわけを考えよう』とゆっくり書き、子どもたちの考えを進め深めていくのです。課題をノー

トに写し、大工場ができる条件を考える子どもたち。授業は、ここからがおもしろい。子どもたちがぐんと伸びる場面です。

二見小学校の子どもたちは、グループになって考えます。「人が多い」「輸出入に便利」「原材料の鉄を輸入しやすい」など、次々に気づいていくのです。そして「働く人も買う人も多い」「輸出入に飛行機や船を使う」と深めていきます。気づいたことを懸命に自分の言葉にしようとがんばる子どもたちです。

「暖かいから」という発言に対して、雪がふらないことや湿気が少ないこと等の天候の利点に気づいたことをほめて、授業の流れにのせていきます。高速道路の発達や広い平野にも着目してほしいという教える側の思いはあったものの、あえて無理はしない。子どもの気づきに合わせて授業を組み立て、一人ひとりを大切に声かけで、子どもたちは生き生きと輝きはじめるのです。「適切な支援というのはこういうことか・・・」「だんだん集中していくなあ・・・」と、参加者からつぶやきの声。師範授業は、参観している私たちに多くの大切なことを気づかせてくれます。

授業の終わりに「これは、中学校でも出てくるからね。」と先生。誇らしげな表情の子どもたち。子どもは授業でこんなにも伸びるのだとを再確認した時間でした。

## ～ 講演会から～

寺本先生のお話から興味深い内容をまとめてみました。

身近なものから興味・関心を引き起こすことが大切。

工業製品に囲まれているにもかかわらず、その製造過程にあまり興味がないのが現状。日本の工業を学ぶことは、職業選択や将来の日本の在り方を考える時に役立つ基礎知識。自動車工業を教える時は、プラモデルなど、身近なもので実物に近いものから興味・関心を引き起こしていくことが大切です。

理解した上で使うことで、本物の言語力が生まれる。

子どもたちが興味を持つよう、導入時に地名を確認。言葉には由来があり、その由来を理解した上で使うことが本物の言語力につながるのです。

考える時は、必然性が子どもたちにあるかどうか、自分に引き寄せて考えられるかどうかポイント。

子どもたちの身近な人が工場で働いていたり家族が就職する予定だったりすると、必然性は設定しやすい。防災の授業では、自分のこととして考えることが特に大切。子どもが自分に引き寄せて考えられるように工夫するのが教師の仕事なのです。

資料の読みとりは、言語力・読解力が求められる。

新学習指導要領においては、社会科をわかりやすくするために **地図、地球儀、資料や統計など** をていねいに扱うことを重視しています。資料には複雑なものもあり、読み深めると非常におもしろい。資料が理解できないと一問一答になるけれど、読解力がついてくるとかなり深く読みとることができるのです。

防災教育は、社会科の単元で扱うことができる。

防災教育は、4年生の消防の仕事、5年生の自然災害、6年生の江戸時代の大地震などで扱うことができる。江戸幕府崩壊の背景には自然災害があるのです。

仲間や他者とつながってこそ言語力が生まれる。人に説明できれば、自分の中に考えが残る。

子どもは、問いに対して短い言葉で答えます。何が、どこで、だから・・・と言葉をつけくわえると表現できるようになります。長いフレーズで表現できた子どもをほめたり、**ペア学習**を取り入れて人に説明する場面を意図的につくるなど、工夫することが大切です。また、表現するには生きた知識が必要。根拠を元にして発表できるようにすることが大切なのです。



こんな場面を意図的につくりよう！

いいかえると・・・（事実の確認）

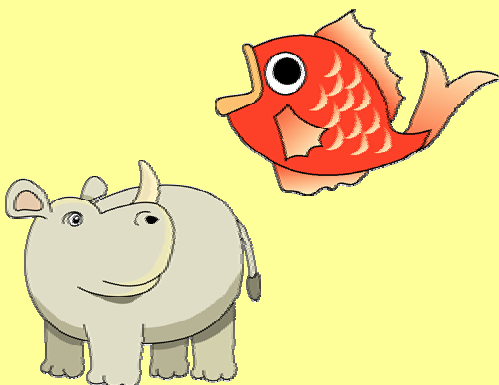
くらべてみたら・・・（比較の思考）

だからこうなるんだあ！・・・（意味の発見・価値更新）

どうしてだろう？・・・（疑問の表明）

「さい」ではなく、「たい」のある授業を!!

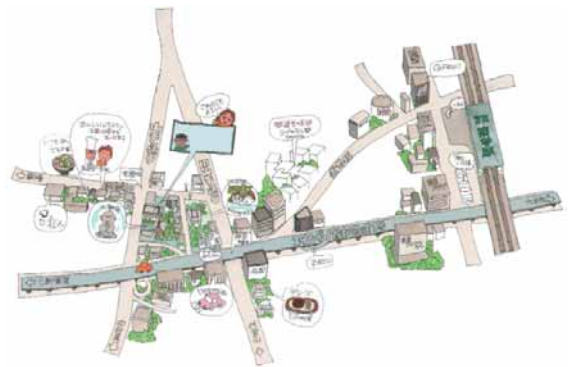
教師主導の「～しなさい」という授業ではなく、子ども主体の「～したい」の授業をつくるのが大切です。子どもたちの意欲を高め、子どもの気づきをもとに授業内容を組み立てていくためには、教材研究が欠かせないのです。



## みなさんのアンケートから



- ・今まで自分の中にあった社会科に対しての苦手意識が少しとれたように思います。社会って楽しいなと思ってもらえるよう、ひと工夫加えることの大切さを改めて実感しました。
- ・授業では「なんで?」「どういうこと?」という言葉をよく聞き、子どもたちが自分の言葉できちんと最後まで表現するという活動をよく取り入れられていることがわかりました。普段の授業で勝手に子どもの言葉を組み取って授業を進めてしまうことがあるので、子どもの言語力を教師の私が妨げていることに気づきました。また社会科での発表活動は大変目をうばわれるもので、授業とはこのように作っていくのかと思いました。実践していきたいと思います。
- ・次の授業に生かせる授業をしていただいたのが大変ありがたかったです。特別新しいことをされるわけでもなく、ちょっとしたアイデアややり方でおもしろい授業ができることがわかりました。
- ・大変よかったです。生活科から社会科につなげていく地図活用の大切さや、人ごとである社会科学習を「自分のこと」として引きつける手立て等、具体的な取り組み方がよくわかりました。秋からすぐに役立つことが多かったです。
- ・社会科のおもしろさがわかりました。自分で開発していかなければと思いました。社会科が苦手な自分にとって本当に有難い研修でした。自分のまわりの出来事にもっと目を向けていかなければと思いました。
- ・社会は好きなので授業は工夫していますが、今日の話で今まで以上に工夫するアイデアをいただいたように思います。社会が好きな子を一人でも増やせるような授業の工夫を大切にしたいと思いました。日々の忙しさの中で工夫を忘れていること、地図帳の活用をあまりしていなかった点は反省点です。
- ・社会は苦手な科目ですが、今日のお話を聞いて工夫してやってみようと思いました。“たい”のある授業をひとつでも多くできるようにしていきたいです。地図帳もっと見てみようを思います。



二見小学校の先生方、ご協力いただきありがとうございました。